



東京ミッション研究所ニュース

第 89 号
2019 年 12 月発行

〒189-8512 東京都東村山市廻田町 1-30-1 東京聖書学院内
TEL/FAX 042-396-5597 郵便振替 00150-5-29091



TMRI 功労者 齋藤孝志師を偲ぶ

水間照弥 東京ミッション研究所理事長、東京聖書学院
名誉教授、JHC新井教会牧師

齋藤孝志先生との最初の出会いは、府中教会の開拓を有泉姉の隠居部屋（四畳半）で礼拝を守っていた時でした。私は大学時代蒲田シオン教会で信仰に導かれ、卒業してからNECの府中事業所に就職して、府中で教会生活を送ろうとして、探していたのがここでした。

先生がこの狭いところで声高に「世界宣教」を叫んでいるのに違和感を覚えて、次に行くことを躊躇しましたが、何か惹かれるようにして行き続けました。先生は、この世界宣教を教会でも学院でも生涯語り続けられました。また、先生はしばらくして、教会形成を具体化する為に、会堂建築を語るようになりました。これについてもこの人数で考えると破天荒に思えて違和感を覚えました。先生は、この狭いところで、両手にも満たない僅かな人数の中で、「世界宣教」と、その拠点となる「教会の形成」を毎回の礼拝で叫び続けられました。しかし、その叫びが、あの荒野の声と言われたバプテスマのヨハネのように府中に由木に会堂を建築するに至ったのですから、先生の叫びが天に届き神業をもたらせたと言う他ありません。R・リー博士が「TMRI・東京ミッション研究所」を立ち上げられた時に先生がいち早く参画したのも、わが意を得たりだったからでしょう。

齋藤先生のこのような熱いメッセージの出所は、アブラハムの生きざまを範としているからでした。アブラハムは神の声を聞いて「行く先を知らない

で出て行った」（創世記12:4、へブル11:8）と「開拓伝道」がからみますし、「地のすべてのやからは、あなたによって祝福される」（創世記12:3）と「世界宣教」がからみます。さらに、アブラハムはこれら担い手のはしりとして「あなたの多くの子孫」（創世記17:6）、「イスラエル」を視野に入れ、そのために献身しました。先生もこの事に倣って「世界宣教」の「担い手づくり」、「献身者養成」のために東京聖書学院や、府中教会、由木教会、厚木教会で、最後は長谷集会所に於いて奮闘されました。

齋藤先生の神学的発想の基本は渡辺善太博士に負うところが多く、授業で二言目には「渡辺先生は・・・」、「正典論的聖書解釈は・・・」、「救済史的聖書解釈によると・・・」と繰り返し言及していました。性格的には、激しく、授業も「口角泡を飛ばす」スタイルを常としていました。先生は、多読でした。そして、ジャンルを問いませんでした。そこには既成のホーリネスの枠を超えて行くところに本当のホーリネスがあるとの確信があったからです。しかし、ホーリネス的伝統で育った人々には戸惑いもあったようです。また先生は、文書の人でした。それには「キリスト教は、書かれた文書としての聖書の上にあったし、あるし、これからのもある」との前理解があり、自分も文書を通して自分なりのキリストを証言するとの確信からでした。最後まで出版に精を出され、著書を通じて今も先生と触れられることは、私たちの財産です。

6月24日～26日 夏季学校報告

文化の神学

～ 神の国の平和をもたらす文化を変革する教会 ～

講師：藤原淳賀（ふじわら あつよし）*

キリスト教はいかに文化に関わり、文化の影響を受け、文化を変革してきたのでしょうか？キリスト者はいかに平和を作り出していけるのでしょうか？この夏の夏季学校では、青山学院大学教授の藤原淳賀氏をお招きして、貴重な講義をしていただきました。特に、プロテスタントの代表的神学者の視点から、日本のキリスト教史を概観し、カトリックとの対話も視座に入れ、ナショナリズムの高まる現在、神の民がいかに平和を作っていくのかについて講義がなされました。

第1部「文化の神学」では、二度のセッションで、H.リチャード・ニーバーの神学にふれ、文化をいかに見るかを典型的に整理しつつ学び、そこから、スタンリー・ハワーワス、J.H.ヨルダー、そして P.ティリッヒの文化の神学に深めていきました。第2部では、「キリスト教の戦争観と平和構築」をテーマに、キリスト教の戦争観を神学の歴史を概観しながら考察し、それを踏まえて、K.バルトの平和優先主義と J.H.ヨルダーの絶対的平和主義が紹介されました。

第3部では、「歴史の中でのキリスト教と文化：平和を作り出す神の国への参与」と題して、カトリックとの対話をしつつ、キリシタン時代に最初にキリスト教と出会い、7世代にもわたって信仰が継承された日本の宣教史における衝撃の事実から、戦後のキリスト者に何が今問われているのかが語られました。

今回の内容は、授業を受けた東京聖書学院の

修養生のレポートから二つを紹介する形で報告とさせていただきます。

～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*～*

報告1 嶽森幸一（本科2年生）

セッション I では、H.リチャード・ニーバーの神学が紹介された。ニーバーは、イエール大学の教授であり、キリストと文化についての研究をした人物である。神学者を多く育てた神学者でもある。著書『キリストと文化』の中で、現在のキリスト教への批判と継続する問題を提示する。そして、「キリストと文化」についての 5 類型のモデルを提示する。ニーバーの考える最も良いキリスト教は「文化を変革していくキリスト教」である。

キリスト教は文化に影響される。そのために、教会は常に自己吟味し、改革され続けなければならない。また、ニーバーは神中心相対主義を唱える。クリスチャンは神を中心として全ての人々に敬意を払い、愛し合うことが大切だと言う。

セッション II では、文化の神学の展開が語られた。J.H.ヨルダー（以降、ヨルダー）はバーゼル大学において K.バルトの元で学んだメノナイト派の神学者である。ニーバーの文化の変革について批判的な立場を取る。ヨルダーは文化を見る上で、様々な要素を見極める視座を養い、世と神の境界線に立って、良い共同体の一部として見ることが大切だと言う。

S.ハワーワスはデューク大学名誉教授であり、今世界で最も注目されている神学者の一人である。ハワーワスはこれからの教会において、人格形成、共同体、物語の3つが大切だと言う。良い共同体として「教会が教会にならなければならない」。教会は神を愛し、隣人を愛する共同体であ

*慶應義塾大学大学院、米国ゴールデン・ゲート・バプテスト神学校 (M.Div.)、英国ダラム大学大学院 (Ph.D.)で学ぶ。東京基督教大学専任講師、聖学院大学総合研究所教授を経て青山学院大学 地球社会共生学部教授・宗教主任。元慶應義塾大学特別招聘講師。日本バプテスト連盟・恵約宣教伝道所にて牧会にも従事（非常勤）。著書に *Theology of Culture in a Japanese Context: A Believers' Church Perspective* (Wipf and Stock Pub.), *The New Lion Handbook: Church and State in Japan since World War 2* (Consultant Editor/聖学院), 『ジョン・H・ヨルダーの神学：平和を作り出す小羊の戦い』(共著/新教出版社), 『愛に生きた証人たち』(共著/新教出版社)他。

る。その中で、主イエスに倣った人格が形成され、主イエスの物語を共に歩むことが大切だと言う。

最後に、講義全体を貫くテーマと私自身の伝道者(キリスト者)としての歩みを考察する。今回の7回の講義を貫く中心テーマは、マタイによる福音書22章37~39節である。

『心を尽くし、魂を尽くし、思いを尽くして、あなたの神である主を愛しなさい。』これが最も重要な第一の戒めである。第二も、これと同じように重要である。『隣人を自分のように愛しなさい。』(聖書協会共同訳)

文化の中において、クリスチャンは誰しもその文化とキリストのどちらを取るか選択を迫られるときがある。すなわち、その文化を愛するか、キリストを愛するかである。ときにクリスチャンはその狭間において苦しむ。心の中ではキリストに従いたいと願う。しかし、この世の中において今自分は生きている。生きていくためには自分がしたくなくてもこの世に合わせなくてはならないのではないか。そのようなことを思い、キリストへの罪の意識が生まれ、クリスチャンである自分に葛藤する。「自分は何を愛するのか。」この質問は今も昔もこれからも、クリスチャンに問い続けられていることではないかと思う。

この日本の文化の中において「愛する」ということは、私のクリスチャン人生においてなくてはならない主イエスからのメッセージであった。

私が人を「愛する」ということに躓きを覚えたのは、会社で働き始めてからのことである。私は、クリスチャンホームで生まれ育ち、神のことを信じて歩んできた。主イエスの歩みが、正に愛そのものであることに、深い尊敬をいただき、神に従って歩んでいきたいと願っていた。しかし、会社に入って世の中の人々の歩みを見たとき、私は正直、この人たちとは完全に相容れることはできないだろうと思った。聖書では「それは罪であるからしてはいけない」ということを、会社の同僚は平気でしている。そして、私にもそれを誘ってくるようになった。同僚からすると、仲間として迎え入れたいという思いから誘ってくれるのだが、私は主の教えに従

いたいという思いから、自分はクリスチャンであることを表明しそれを拒んだ。反発されるとは思っていたが、案の定だった。「何故お前は皆と同じようにしないのか。」そのような問いを掛けられ、そして奇異な目で見られるようになった。私はそのときキリストとこの世(文化)のどちらを愛するかということに苦しんだ。

ニーバーはその著書『キリストと文化』において、キリストと文化の関係には5つの類型があると言っている。

- ① 文化に対するキリスト
(Christ against Culture)
- ② 文化のキリスト
(Christ of Culture)
- ③ 文化の上にあるキリスト
(Christ above Culture)
- ④ 文化と逆説関係にあるキリスト
(Christ and Culture in Paradox)
- ⑤ 文化を変革するキリスト
(Christ the Transformer of Culture)

①は文化に対して完全に反発し、②は文化に対し寛容である。③はキリストも文化の上にあるとし、④はキリストと文化は全く分離しないが、矛盾するとする。そして、⑤はキリストによって文化が変えられるというものである。

私はこの5類型を知ったとき、会社に勤めていたときの自分は④であったと思った。全く分離することはできないが、キリストとこの世は矛盾している。そう思った。私はそのことのゆえに、同僚を愛することができなかった。いや、むしろ敵視していたと思う。

今回の講義で深く考えさせられ、慰められた言葉がある。それは、「愚直であったとしても、父が求めておられることを選ばなければならない。」というセッションIIで語られた言葉である。私は会社にいたとき、苦しくはあったが本当に主の言葉に従って良かったと思っている。あのとき従っていなければ、信仰が高められることも、献身することもなかった。

しかし、それと同時に、今までも何度も問われていたが、改めて問われたことがある。それは、「主イエスは何と言われるか?」という問いである。

主イエスは、人を傷つけるくらいなら、自分が犠牲になることを選ばれた。つまり、隣人を愛し、敵を愛したのである。そして、主イエスは、私が敵であった時でさえ私を愛してくださった。

「あなたは私を愛するか？」と主は言われる。私は本当に、愛することができていなかった。主イエスが私を愛してくださったように、同僚を赦し愛することができていなかったのである。そのことに改めて気付かされた。

日本の文化の中でキリストに従って歩むとき、困難が伴う。それは、クリスチャンの歩みの歴史を見ても一目瞭然である。絶対に愛せないというときがあるかもしれない。しかし、神の愛を知った者は、その神の愛に生きることができるのである。私自身を見ても、完全に愛を全うできているなどとは言うことはできない。しかし、神の愛をもって赦すことができる体験をさせていただいた。自分自身が赦せない状況でも赦す体験をしたとき、自らの心がとても解放されたことを見た。

最後に私は主イエスに、アッシジのフランチェスコがした祈りを捧げたいと思う。「私に慰められることより慰めることを、愛されるより愛することをさせてください。アーメン。」

~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*~*

報告2 平野茅（本科3年）

300年先を見据えて今を生きる

◇セッション I 要約

リチャード・ニーバーを取り上げたセッション。彼は自分の立場をはっきりと述べつつも、神中心相対主義の姿勢を取り、「すべての他者」（彼らも罪人であったが、そこにも神はおられて、彼らに語られ、彼らを用いられた）への敬意を持っていた。自分が命をかけて信じるものは思い込みで歪みがちであるので、告白的確信とすべての他者への敬意をもって、信仰を告白的、共同体的なものとして捉えることが求められる。

◇セッション III 要約

キリスト者として「平和をつくり出す」とはどういうことかを問うたセッション。キリスト教の最も大事な

教えは「神を愛し、自分を愛するように隣人を愛する」ことである。戦争とは、相手にこちらの意志を強要すること、つまり自分のしたいこと、自分がしてほしいことを相手に強いることであり、痛めつけることが目的ではないが、多くの場合はその形態を取る。神学論争ですら、愛に基づいて行わなければ「戦争」である。世のただ中で神の基準をもつことが平和をつくり出す選択である。

◇セッションを一貫して流れるメッセージ

リチャード・ニーバーの「神はすでにここにおられ働いておられる、だからそのわざに応答しなければならぬ」という言葉が繰り返されていた。この世の平和のために、神が今、どこで何をしておられるのかを問い、また、その「自分を越えた働き」に目を向ける。同時に、今、どこで自分の役割を果たすべきか、時間的・物理的・信仰的な自分の立ち位置を把握し、主に応答することが必要である。

◇300年先を見据えて今を生きる

全体として、今、この世に、この日本に、教会が、キリスト者が平和をつくり出す者として召されていることの大きさ、重さを思う時だった。自分の中にさえ平和・平安のない小さき者だが、主によって、主によって、そこに立たされている。壮大なご計画の一部、一通過点としての自分を思う。今、自分がここにいる、生きている、立たされている、召されている、ということが、300年先のこの世、300年先の日本、300年先の教会、300年先のキリスト者に、そのもつと先にさえ、つながっているのである。自分がどう行動するか、言葉を発するか、キリストに従っていくかが、そこにつながっていることを思う時、恐ろしい思いすらする。おののく。

300年先を考えると同時に、今までキリスト者がたどり、「キリスト教」がたどった歩みを思う。それは、私たちに、私に至るまで、300年前、もつと前からつながってきた歩みである。2000年間を振り返り、平和主義について、また義戦論などについてキリスト者がたどってきた歩みを知ることができて良かった。自らを振り返ると共にキリスト教

会全体を振り返る学びでもあったからである。

多くのセッションで取り上げられたこととして、キリスト教会が長らく放置していた大きな使命、「赦し合う」あるいは「和解」というテーマがあった。2日目のディスカッション、私が参加したグループでは、主に国同士の戦争についての話が展開し、そこに立つ「神の基準」が一致しているかどうかということが挙げられた話題のひとつだった。それぞれが別の「神の基準」を打ち立てているので戦争が起こるといような主旨だったのだが、私はもっと身近なこととして「赦し合う」または「和解」ということを受け止めた。共同体は一人ひとりによって構成されているからである。

自分自身を顧みても、赦し合うどころか「赦す」ことすら難しく感じる。キリスト者たる私たちは、一人ひとりが違いを認め、愛し合い、赦し合うことで、その「赦し合う」ゴールを達成する。愛のある共同体を築くということは、「兄弟姉妹として共に生きるか、共に滅びていくかのどちらかである」とキング牧師が言うように、この愛によって建て上げられる共同体をつくるためにふさわしい、愛のある手段を用いることである。教会を教会として建て上げるなかで、「赦し合う」とは、互いの物語を聞き、互いの苦難を知り、互いの痛みを分かち合い、互いに痛むことであると言う。赦し合うことをしないのであれば、私たちは神の民として生きていないことになると言う。であれば、私たちは赦し合うこと、和解のつとめを自分から始めることが必要であろう。

ある人に「あなたが苦手だって言うから、あの人のことが苦手になった」と言われて、愕然としたことがある。日常のことですらそうなのだから、300年先を考える時、自分の言動がそこに及ぼす影響を小さく見積もりすぎてはいけないと思う。同時に、自分から始める和解のわざが、主のみわざの一部を担わせていただいていることを思う時に、それも小さく見積もってはいけないと思わされる。自分にできることから始め、それを主が用いてくださることを信じて感謝する者でありたい。自分から始められることは小さいかもしれないが、隣人に広がることとして誠実に和解につとめる者でありたい。

■■■■ 故齋藤孝志 略歴 ■■■■

1935年福島県出身。青山学院大学英文科卒業。この時代に、レイモンド・シェルホン宣教師に出会い川崎教会に導かれ、キルボルン師の通訳として福音十字軍の働きに加わり、全国のホーリネス教会を巡回。献身に導かれ東京聖書学院で学ぶ。渡米し、アズベリー神学校留学中、助川満江と結婚（四男に恵まれる）。また、フラー神学校でも学ぶ機会が与えられる。

1963年に帰国して以来、2005年に至るまで、東京聖書学院で教鞭をとり、ギリシャ語、ヘブル語、旧約概論、モーセ五書、聖書解釈学、キリスト教倫理、教会論など、多くの授業を担当。また、研究機関である東京ミッション研究所の設立から発展に至るまで尽力する。1992年に「エペソ人への手紙における教会の本質と日本宣教への提言」を提出し、アジア神学大学院より牧会学博士号(D. Min.)を取得。牧師としては、府中教会開拓、由木教会開拓に従事し、1977年より厚木教会に任命され、社会に開かれた教会の形成に尽力する。2010年引退し、長谷聖書集会を始める。

2019年7月17日主のもとに召される(84歳)。

----- 主な著作 -----

- 1978 『クリスチャン生活の土台』CLC暮らしの光社
- 1981 『真の礼拝とは』JHC出版局
- 1983 「正典としての聖書」『論集聖書』東京聖書学院(TBS)
- 1984 「正典としての聖書——聖書的説教と教会形成をめざして」『福音主義神学』第15号
- 1990 「エペソ人への手紙における教会の本質と日本宣教への提言」牧会学博士論文 アジア神学大学院日本校
- 1992 「三位一体的構造をもった神の国の神学と聖霊」『論集聖霊』TBS
- 1999 「歴史を形成できる教会」『論集教会』TBS
- 2002 「聖霊論的宣教」『論集宣教』TBS
- 2010 『無限の価値と可能性に生きる』ヨベル社
- 2011 『決定版・クリスチャン生活の土台』ヨベル社
- 2013 『道・真理・命 1——ヨハネによる福音書に徹して聴く』ヨベル社
- 2014 『道・真理・命 2——ヨハネによる福音書に徹して聴く』ヨベル社

TMRIからのお知らせ

◇2019年夏季学校の報告

- 去る6月24日～26日に、「文化の神学—神の国の平和をもたらす文化を変革する教会」と題して夏季学校が開催されました。講師として藤原淳賀氏(青山学院大学教授)を招き、重要なプロテスタントの神学者の視点を紹介しつつ、日本の宣教史を概観し、今日の私たちが神の民として、いかに平和づくりに参与するかを学びました。詳しくは本号をご覧ください。

◇TMRI功労者 齋藤孝志氏召される

- 当研究所の設立から発展にいたるまで、長きにわたって労された齋藤孝志氏が、7月17日に静かに天に召されました。葬儀は厚木教会にて家族と教会関係者を中心に執り行われ、9月11日にTMRIと東京聖書学院共催で「お別れの会」が開かれ、故人を偲びました。

◇TMRI 30周年記念出版の予定

- 故ロバート・リー師記念出版を、TMRI30周年に向けて準備してきましたが、来年度に出版記念フォーラムを延期しました。
- 日本伝道会議の「日本社会と宣教」プロジェクトが編集した『社会に開かれた教会—地域の福音となる新たな一歩』(西岡義行、井上貴詞編著、犬塚契、横山聖司、渡辺聡共著/いのちのことば社)の出版協力を行いました。2年連続でなされたTMRI冬季フォーラムの内容なども盛り込まれています。

献金者名

2019.5. 1～2019. 11.20 (敬称略)

- ◇団体: 新井キリスト教会、鹿児島武キリスト教会、厚木キリスト教会、メノナイト教会連合、サフラン会(上野教会)
- ◇個人: 池田洋一、萩生田明、飯島庸江、横坂節子、水間照弥、西岡義行、中川美弥子
* 尊い献金を心から感謝いたします。

◇◇◇◇◇◇◇◇ 東京ミッション研究所の関係書籍案内 ◇◇◇◇◇◇◇◇

- 『天皇制の検証—日本宣教における不可避な課題』 ロバート・リー編 新教出版社 1700→1400円
- 『これからの日本の宣教—発想の大転換』 TMRI 編 いのちのことば社 2200→1500円
- 『宣教のパラダイム転換上・聖書の時代から宗教改革まで』 D. ボッシュ著 7035→6000円
- 『宣教のパラダイム転換下・啓蒙主義から21世紀に向けて』 D. ボッシュ著 7875→7000円
TMRI 訳 新教出版社(上下一括割引 14910→12500円)
- 『日本と西洋キリスト教—文明の衝突を超えて』 ロバート・リー著 TMRI訳 2940→2400円
- 『<聖>をめざす旅』 アラン・クライダー著 棚瀬多喜雄訳 東京ミッション研究所 3150→2500円
- 『社会を動かす礼拝共同体』 J. H. ヨーダー著 矢口以文・矢口洋生・西岡訳 TMRI 2940→2300円
- 『愛する人が襲われたら』 J. H. ヨーダー著 棚瀬多喜雄訳 TMRI 2100→1500円
- 『赦し—新しい人間関係を生み出す』D.アウグスバーガー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 1700円
- 『イエスの平和を生きる—激動の時代に読む山上の説教』 グレン・スタッセン、デービッド・P・ガッシー著 棚瀬多喜雄訳 いのちのことば社 2100→1700円
- 『平和の契約—福音の聖書神学的理解』 ウィラード・スワートリー著 東京ミッション研究所
いのちのことば社 特別価格 7140→5000円(まとめて買うとさらに割引が可能です。)
- 『敵対から共生へ—平和づくりの実践ガイド』ジョン・ポール・レデラック著 水野節子・宮崎誉共訳、解説・片野淳彦、西岡義行 東京ミッション研究所 ヨベル社 1050円 → 800円
- 『ジョン・H・ヨーダーの神学—平和をつくり出す小羊の戦い』ヨーダー研究会(中島真実、矢口洋生、藤原淳賀、マーク・ネイション)東京ミッション研究所 新教出版社 1950円→1700円
- 『神の宣教—聖書の壮大な物語を読み解く』クリストファー・J・H・ライト著 TMRI 訳 いのちのことば社
- 『イエスの足跡に従う—アナバプテストの伝統』A.スナイダー著 中川美弥子訳 ↑1~3巻
矢口以文共訳 東條隆進監修 東京ミッション研究所 2000円
- 16 **新刊** 『社会に開かれた教会—地域の福音となる新たな一歩』 西岡義行、井上貴詞共編
いのちのことば社(TMRI 協力) 1540円→1200円 ※本年10月リリース